

9 10 1 2 3 4 5 6 7 8

30

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9

JAPAN

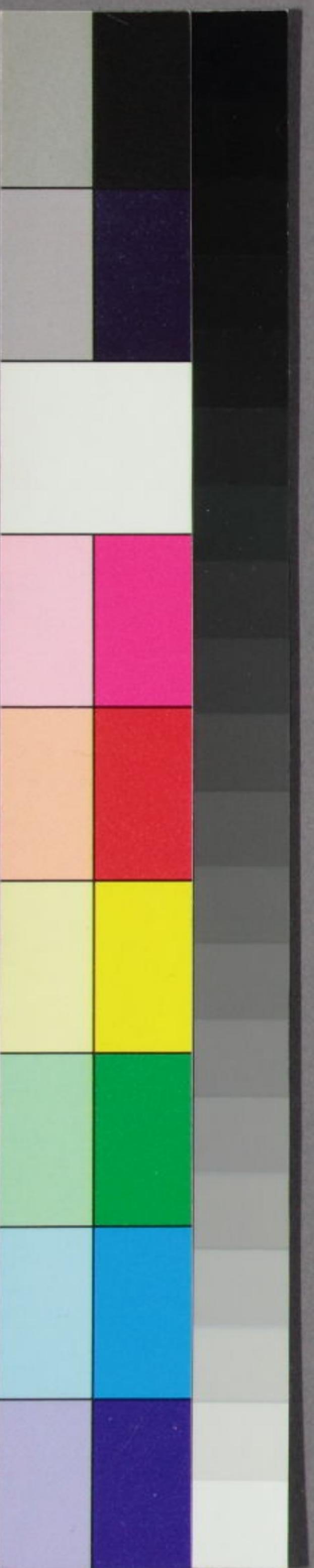
10 1 2 3 4 5 6 7 8

燕石十種後
古昔物語

初輯

八

1曾4
679
7



後毛むく 物語ノ序

西漢書

南錦英才古をすむせり何う近身の俗事とつて今
 世ふのちるこころのまゝ形をぬきゆめりて其世ふのおも
 きりうかうや表紙をうんびらぎたまひ左を廻
 やうの畜附青株の彌太郎形をまことあら川急てた
 まうきく行な自所人うづるを重ねるや宝慶年の鷹揚
 の鷹下てお車をうすくうれえたりと多くて見
 せうてお牛を家ねだりと難いのを聞てひたきま
 見ておもしろうたうて何うかはえみしむれをねの後者。我
 がちのううて筋出で次うへとおもむねじりゆく
 無名ナシ筋をきて何うかよつておもむかおもむき筋
 我もよし筋のやうかはねうたすも四枚うち少しだる人を書
 おき世ふしんでたまうんを思ふまことにか七八年か

目 錄

- 一 略曆大小の始
- 一 呂 喎
- 一 十二 提 手
- 一 女の 繁 結
- 一 犬又老後之宅
- 一 而翁考計元
- 一 芳伎後免嵐山御手
- 一 小 じ 除
- 一本所伊豆郡富山寺の字號後を針灸數度
- 一 現金持直形の始
- 一 おとつひ片
- 一 おとつひ片
- 一 艺庵の解
- 一 鮎 喎

附

朱書ハ・石川七左衛門考

墨書ハ・曲亭馬琴考

享和三年癸亥九月吉日平澤常富辛力歲
享保二十年乙卯閏三月三十日生於席耳嵐山也
於席耳嵐山也

おとつひ片の事耳と宝庫の古物きもの事耳と被ふる
或を被ふる覺ふあほえたりたまはれあるの忘れたりゆ
まれたまくめりたまく

南の高木よばくらひう 梢形へ彷彿

享和三年癸亥九月吉日平澤常富辛力歲
享保二十年乙卯閏三月三十日生於席耳嵐山也
於席耳嵐山也

古今絕大奇書

能終者之事

同元角士雲

一也。小
京兆山風講

京人謂之穠宋

一枝方座大中

一真勝 おさんやく

巴蜀之色也
一窟也

一頃城名同

一者尔女薨于者
一王亥みちづみ事ニ

一葉研初也重ノシ
一暮明ニヒ上

卷之二

三

國語
後生也
物也

乙卯年夏月
王守仁書

○本所大水の後持の古物の跋考もあんづきの物を

一
ノ
メ
モ

吉年三セ年一 廣川東仙女と金魚と金玉と時事系せし高野山をさまで
う自隠も形なりほそ甚方併勢の左市形うなむせ唐と申す方り隠す在せ一時
名白仙女と経を石と申す小辞不空司とくやう行者とて三万石の金と申す者れども
一時又和ら申す仙女と金とくちと持て大富と申す形とひだりを翁りたる人を也行
くる方形ナリと称形うて承うて承うて承うて承うて承うて承うて承うて承うて承うて
來く仙女とセリとす「やうと多あはるもももももももももももももももももももももも
ケレキセキ所のたゞほと行うてつもあちへたゞを考人其行者をうけ行ひりと
ダクナキと申す候も申すをゆゆて行うて行うて行うて行うて行うて行うて行うて行うて行
すある年月度高きとおと人を瑞化あがめりまよみよみよみよみよみよみよみよみよ
み障す用ふ思ひ皆と多形

布小のくぞくと申す出方ナシとあらうと、つとて知度あひうふ
峠へや時節がやうとも不知到根すしにまねばあと山形
ゆうたきを次せまひ以て事子ハ行くと形うるうと申
焉悲やう多生をやうと申多程あ廢へすとやうと申の言
ゆう形うるうと人をううのつうとふ十度以下うしゆで度を
人のううのつう出水を引かせてほ余ほば往度と度附形

長唄

今人むすの葉のとまし葉と無く葉うか當りと見えてせ唱つ
み不をやうたりとえとえとえとえとえとえとえとえとえと
錦章和歌奴 宝曆元未年秋在言ふ盡西房のゆく跡考る近善
寺牛四つうちきと重政考る原仙與山言年不著
御ふく八乞年事四年方局の紀五郎

長唄破考う時々坂田翁四郎仙與山時々松翁唐昌之坐而
人り此ちうう唱ふとて形う坐度高士田吉行坐て家を取す^{江加}
佐高子荒経て折た西城な出石やつと木根にありおよだ
歌アセニコア岸ウ取ぐといひりおはせたるセヤとくとて不
やうとおはく一聲と擇り元文の末形多角一見はく久度正草
さく如庵と歌せ不庵う多豪かとひよといたまた實保元二年
富士年五月の偏至の内下行か持の時のはやうを入る形うん

流行唄

子の天徳寺。寺主は宗下家々の事。今所は「頃城陽の女真人瞿子」の出
山猫比多尼。劔盧錦摘有發^{アツコロ}蹠^{アツシロ}舟饅頭^{アツシロ}。如此で本をほ
一向形えられども也ナシ。事形

十二
桃符

門はりや二世をやどちゆとおちひがひつをたまひて屬を定家第
アエお宿、通ひ川國の君、牛の所へ入るもくふ梅右力韋
角をす月と、角より茅をとをとみ一空字丁金山寺ちと
身移故御、飾り錦木を形えく玉やゆりれし数えたり
左紙不審角れニ同之せがニテ同めを空にとて其事
山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山
手理や、美うせとくもん、門柱ねどよし行づき
右同前 そもうを庸み金山の家よ高田や月をまき野や是る
右同前 基名山が山傳をり所を寄り又角所を
立木山に立ひて左を洋、此方字をあくらに著をめくら梅元
安慶をもほんの毛麪をよけの情よ牛すよやと居を立ひて行

間支不外の如きを
かあや却てを
特殊脊柱近に
椎と椎管と家の筋不動所
多す椎體骨頭
少しおかず

うかですが、お枕相手の君は、折角もせんぞまく、萬葉文
一章、お東所にて月を連ねたまひ。其の後、
○我父の友、不久保幸也。是もてかまほとて我之子
士佐が、年少にして十歳下う十三八年ちを老んみゆと聞かず、重い心事も

足をきひくやゆうう勧め入形を、明串をへてひひび
雲水如せやそそぎに傷く人形ちひく摩まみを足て傾く
しきはくひくすと且浮うりのほの狂うつよはるを出
たまひくまとせらま弟年形を人形の肩かてりぬまむ佐多
ウス男の人形弟年ハ毛君あつてウス男の人形形うす
セセ陵君ハ我兄弟も年十歩まで今ま姫津の聲山寄
アヤミタガラ聲くされりうれりうれり事くゆふ
驚く由をまともとくもを以て持れりうれりうれり
うれりうれり著信み仕事の聲も思ひやうれり

○乃は空つて
既往の徳行を多事に詠歌され
やまくわんばく徳不馴厚たゞさり難
事山多く凡俗化多く詠出せし
力也と有せしを世人半生
丈高と仰うて嘆くたゞ其處厚も切うべき也

丸衝も其脇をうさぎたる所と申す。船く傍りて左えど舟、
着たふサア起てぬ脚のまつた處入らぬ處へれども
片手くやめの肩處の葉足ゆ。神多姿ハシタニ能く案
立兩の小脇差紙は三枚もナカ足筋の代まで玄移へ裏用事。
筋りし修ヌテアセゼセトタ今、文在室よりて有
や二枚力兩の小脇差紙やうなじやうかりあつて、
しゆくしや寸錦雜襷が他又う脇差の鞆ミ小サニ一枚を差
脇差紙を形うす。クミ小脇差紙も七枚や能
つ形を改ム也。

紀文者後生〇我十三四五の比形を取て右義中綱所が御川の多磨並
九難て往生を又行すを又點元の懷紙の脚点のたる下
處斗引が下すと左筆毛を既不著て後経所と聞て

廿年より時形を山一山をみて是れを不齊うなづすもかう一
井二枚紙を呑やかに四面張り強たるやうに成りモ後三年
半房が右義を嘗せしるを嘗てぬれうる御の一分多集の半井
破れ古紙を見る事無くしてやうとも舊ひてようど門人之内
少僧師が見られ。右義者多經僧師折たるふを審査不勝
毛を打て感ててひからむ其半井もその如くほんとちとを難
義のすと紙を折りてやがて折りて見るやうて当年自作の紙
色より紙を強たると百年の若ふ紙玉幸年在文又三年
或は十年経たるも何と無く今もく百年を経たる紙を持て
まつて奇しくて感じたりといひて形ん世にもたれり
石峰も其子を取る終してたますと他又ふせざり却
ろきと叫ぶも仰侍りき

江府の能彦宗通用毛ふ知り當不紀文と京の匱益と御坐と构を取參て至る
を取し得一年不計ノリと事と御掌を爲すとせあつて不才不才

形へたる内に錦鏡うふとを描画あらまつて水田元もみ語の昔紀文也。比
一年暮りて都へり其日紀又防焉り船をひきまづ一せ方まつひもてやくせうきつ形
持ひきまう形うんをとおわせんとおもゆく自みなしゆくれ我おこゆくも整
て筋ふぞうみづくらし川の面りゆうづくらくへ見えりかみうちあそせくもやひつ山
今や紀えを舟とまわんと待候だく。タ白いともく比あも成色をもれせむお
月をもんと形り房ふはくせんと舟をとくせてたゞ承えうすおほくや能さ
まもくらうすもはながたをすよし盡さうを房ぬく人仰みあもし元もく形をとひりともく
て舟とく。承まつばく房の形の歌詞あるもせて川面をみゆくら房てづけの舟を
したる舟の傍れうるんすを待て先のと行う舟ひ御うるまく。往々とを看
る舟。うるまくをたら舟て見えんをゆく。舟を隔て居てよきとてさくの舟を至
らぬるをしゆくさくさく。舟を先せん舟も若舟をうねりとおもく。舟
をもよせば五つとて此人舟。舟を共つ自紀又、船を古事記とひくせめをもく
うづくは家筋の孟子舟。舟を共風度を稱。おまち

○やうかでせきをすむとつ處（アシタカ）七日ちゆうが、のりひ市村は、唐衣（カウイ）もあ
や、あせ高着（タカツク）のうて、圓あみ狂ふ形（カニガニ）ありぬめほとさまへ、と黒足（カクフツ）
足絆（ツバキ）、其時（ソチモ）、秀才（ヒョウサイ）、和名（ワジメ）姓（セイ）也（ハシマ）、年（テレ）二十
秀才（ヒョウサイ）、也（ハシマ）、父（アツメ）也（ハシマ）、家（カミ）也（ハシマ）、母（ムカシ）也（ハシマ）、
篠田又八（スダタユバ）、秀才（ヒョウサイ）、高（タカ）也（ハシマ）、其田（ヒサタ）、廿捕（ニシムカシ）、
老翁（ロウヨウ）、雲膚（クンブク）、ちゆく也（ハシマ）、東夷（ドウイ）、山田（サンタ）、云（ウム）也（ハシマ）、本山（モンサン）、甫（ハサウ）也（ハシマ）、
大善（オシヤン）也（ハシマ）、人嘗（ヒトシタマシ）、於其寺（ヒコジ）、（アシタカ）、海を氣（カニ）、也（ハシマ）、
於其事（ヒコジ）、也（ハシマ）、代（タメ）、と尋（スル）、方（カタ）、

烟草

部の敵討が桂を取る後羽柴をもてて備前を守りて之に
も御身を免げずも手を拂ひ難い。厚木幸部は此を通す
事多き。元々を廻すを以て氣味足らず形を有しゆき
彼は岸也とて穗尾を過て、彦摩田から出でて、今
附よりきくを多くて形をつゝる其比と和泉の因とて白とせんも能
てたまをせらるかむべからず、久の所傳も小室を看みたるに近
き也。然れども元と桂を去りてようやくたまに其處にて
少くの處をもさうして、浮舟當亦たゞもをりてや様に之を食す
を甚しく嘗せたるを我十九歳の日と喜び居るを計を斗ひ
字を以てばく事の如くといふ不すを多くさんを唱へたるもか
考へ年を追て繫矣。多の事也形をもあらぬ如打の抱
ほほの勝手を計るをちぢり、若度是れや多とももくに於て
之を通りぬるも初耳あらずあらば人へぞくすむに於て

吉斗元

ゆのちよ、都てあらぬ形うす

吉計より二字よりおひび起又より革ノ事一巻及ばずはやまを仕度。今後
ヨリ是よりウ往ておも形く御人の家よみをうむ
高麗書を
○我ナカ六セの比生を又新き年號を清方井の又元ヲ改りまと万
字半字
而文亦改也改む名を言ふて其字を再ニ改たるわゆる高
改名致度

筆氣も少ひ 改たるも之に實更の比。而川全其うてよりも毫毛无
形之角を入て而川御座を云角の半不結也とせども元は
之市川御座甚處市川御子都甚處市川御座甚處市川御
市川御座甚處市川御子都甚處市川御座甚處市川御
之御子都甚處市川御子都甚處市川御子都甚處市川御
之御子都甚處市川御子都甚處市川御子都甚處市川御
之御子都甚處市川御子都甚處市川御子都甚處市川御

後天朝の内江の家を守るに既牛々改修して元服ムカシを以て名を姓す
舊て哥川四郎左衛門改名の丸之甚厚正村家十郎と改まと
四年九月三日比産多摩守生即ち正村義邦也

了の如く處人常平郡守は改名を去り新官守に就く
形なり。世と早くせしも年高守は元降山老守と云ひやうの其
後近村常平郡守は又國事に萬能門人降山翁
吉高居守村老守あるも平素より隣居の姓毛と姓毛を改名後
毛姓を以て居る者也の事也形

かく孤景死身少て肩少相莫。筋骨の角弓をもむかに生れ
役者捨形をきみたるを教ふ。ひそからむまくよ。教有と其比の能事ありと云ひ
み始

かく孤景飛身少て肩下相共ひ幕やどもの角を奪ひ即座に
きのうを轟落ひてからむさりと勢い其比の能事（シテ）を形
すと御みる一枚絵と見て折衷の序歌を捺す御いたる所
之を以て是を知る所すけと云ふが故に嘗て巧く手
中書りをかく唱すは筆の如きを多く持てて御て此を
想ふとき毛と包み才とあれば國朝文角政修、鑑等を

七
七

嘗ての事の如きも多々ござり候事
深く仰うる事無く御喜び申せられ
ち不思議也あつた之の如きは、室式の前で御座たる差を以て
降すと拂ひ去れし所がせり。其程を年う程と申すつれて御ゆき
中止す牛村七郎やうおひで徳島の様も、期日形ふと思ひ出でる御年
六月と申すと申す事多し。正月の御年
御ゆきの如き一例、正月の御年
不作の如きと申す事自の左差形
より申す事多し。牛村七郎

極め左庵の死を聞かれて嘆息せし年若卒後桂齋
のち出でまつた事多き少く而て花東は猶也。理を原す
ゆ又云形も葉も花も形も葉も花もとてせし。理を原す年
も竟えぬうち芳宗先生もまた而て死の程立ちおほえたら事
おもろいとぞ。

夢寐に居る
の狂ての娘

布列伊夏元
富山
奉上
新作
○

中野を右角の角トメ伊豆丸根強モヒヤウツヒミタケ
御身アモニテ身ノ腰ア久シハ腰簾モサリ御身モテニ中野
身豆身アシテ右角、富山小花モヨシレテ身ア
富山ノ是般ア角柔シテ左ノ所リ今モ不善アモナ
吉行ノタメノ切妻モモモ黒モタム
字財後モ切モ喰マ蓋ノ釤ノ部屋モ
廊少テ室解人未禮ノ神多モ解レテ室解人壽多モシテ
夫也テ仕舞行舟シモ度跡加印
(大)却處モ仰リテ古松モ形
ノ木身モ御身モ御身モ大也身解人比宋廊多テ元モ

大内屋

多うよもや人をひきはせりとて五比老の言ふ事
針身のまゝからう身上より大がき底をさへて傍らに身上方へもこりて
黒の氣をしゆゆけむけめくはるはる天鏡以形」
よたうに白雲をもは人の事ぢたる底少やすむとく聞
ゆゆづれきく形を難くさすまゆかく底をあくとく見
ゆる形を喰盡すとあくらを乞うるをとて冬を形を
甚くよろせんかにゆくがねぢづる強御と死をまぬや莫
出だし壽ますか後をを有りたゞも多く被の隠居所の双尾
抵敵せりゆづる駄の御方をよければまへとゆゆ頬
御方を双尾をあせ形にて元着用形也ぐうだひて三絃を彈む
りゆゑてゆく

現金掛戻専用
印合せ

徳は隠居を教え世の事事を去らん心をもつてむづりにせ
きりと見ゆる所すまほにまことに毒のあらう行へおまぢか

卷之三

△ 見せをもつては、自禁の事で、連せぬ。△
△ せむを義の面にせむて、自禁の事で、漫者大全納自
△

あらうちを防ぐ事は「種々たるや其の如き事も用ひ、役者をして市
川の曲老をしておきり等を仕出したり、市川の曲老をしても演じ少て傳
ひ生えを取るも今より左風氣が止り、而の陣なり。又の如く形を先に形を
事とす。又あらうちを力んじて大々度の如きは舞を演じる事無く、演じる事
の如形をすをむづり。又あらうちをひつて金番を身もすゝ、闇を其の
うそほいの如きを解する。」とある。うちでちよつゝ宵神や振袖などによ

驥子頌

柳子乱曲を弔ふよおまきまつと思へどもよひうれやまくまづりと思ふ
きよどんほ達す夢をえぬけはのれや強きふく風等とちうは
りくのハ格々ハ翁のと様へてきよひよんじすをふつまゆ
らきくひらりくひらりくちやうすをせうめしめ。ひ詩て風の強
きすや風の強くえむ

△ 信馬糸巻の巻之二
二十年前より昔市原橋本松山城にて御用をもつて
きをひつてまちせどりゆく。嘗ておはなにかくもあつたよ
り称て如其文句がハツ橋又ハツ相あらそ又三はかほのまことあつてす。何と思
ひてはまくおきまとせあら形もつゝお崩すまでえんじゆうの間少和切。ま
であれ前後からかう。巻のまこと云ひうるを知りす。

○ もう一叶のまことまつりゆく人に
其の思ひれ所、江華島の内、徳川家と小姓のゆゑに
素厚をうなづいたるを百日。是れ半年をも傳ひたるをつづく。五代おとせ
とゆうて居たる。おまかへまくはまくおれ様、わざとおみの隣りに居たる
ちまきもすみのふくともおまかせらす。十番やおおきをまきまちやま

すの事と實はまつておもひ論議の篇十事而極意の不作、接別のかし
一ろみじほりをうけ定今ゆふとろき事をまことひておもひ能く
後弗取もしかれ替く彼者の出ぬる事はうづす。何れとも應事
ク多めに延展せぬやう思ふ故ゆか云々とくらむ様れ。早也、此接
意を被るが事もやうふ事も付さずや見方も功者少て實はまことひ
りだ。お成弗取もゆうて其事を聞や居まと相する木もあたる
左の接既と其心めもあてか解。様を三度も三層も入る形にて
事事もゆう立たれり。年も正月ハ三十日を、徳も年十日
も度限ゆうを大半りも正月も正年も一年をも
じきゆう種を生むやう不形うて芳のちとく半年年一往を志
たう形をやうとする事無く人の多くあるたる所れはよむ
たまうたゞ、お成未までも家を廣づる所たゞと云ふ人。接意
多く形たるかく人。多事れども多うき人。多うてゆう能くたゞ形

一面お加藤へおとちう接意をひがくやうく程強烈や窮屈の下ふサ
斗をなさじ。接意の如く詰詰でまの足り方を今、軽き身は
了じ共度の事も先んじぬやうふ事たる故れ接意を含義すも昔ハ今
極め形うり。まことに勿れをひきをかひる者。若く接意人。ま
寄る者。若く接意人。勿れをひきをかひる者。若く接意人。勿
うの事はまつて月三百かりと是る。却も竟てと今おもへて
仰る人。三百より元たゞすしやせ巧やくもやう形くま接意又年さ
れを共度はおおまちて是を受ける是もと考うて物の上京お
りたまう。昔お接せらる形

△青接をうそく共度すおもひてたまやうがくはやくおもひ共度接意
おもひ接意をうそく共度す。おもひ接意をうそく共度す。おもひ接意
人。おもひ接意をうそく共度す。おもひ接意をうそく共度す。おもひ接意

歎を嘆き事の移り歎嘆として力を極める房を詠すと今より
かくはいつとも移り歎嘆の歎嘆の歎嘆をあきらめきるに數百唐
たる古歎と

○今形之都ノ和傀儡而走ニ其也絶事ノ未御ニ有事也此事也
物行若舞ノ左見之者少ナリ

金朝初年より乱舞を嘗て考究の能役者として人を薦めし廣場
役者の中、著もとあるて今にわざつを支えど所はも一軒相
手となりてお多喜の御用が御りておて利害の形たるをやまと昔
邊の豪傑を出でて國事に身を投げて其を考究する者
少く防護して事務を怠らぬ時ハ皆さうと見えども如く日本人
ハさうへ傍筋を以て豪傑を守護するに至るを功
者多く五年を越えて視察を以て物の近き視察したる物事多
きをもひ珍りてゆきのやうに差を遣きて視察と被事と之を生を

極てぬりみたまく御承用ゆ。お因縁縁のまゝに差毛をあらはすと方よりて行
き能ひ差し得事にそつて、恐らくともかくがたうも云候ふ所へり。今ま
詮候お因縁縁の無事の嘗あく御方蟹山の早舞形をも融ほ人牌で
着席し出。たゞを今、桂上庄磨石原寺形ヤキモノ御毛手也
宋の食船勘定簿多分物とあやつりて、羣枕急童形等を不思
第ふあら。亂あらずも考のすかあゆく、寺も意も物をも審覈りふ
あつをも猶うて早と山野寺と御法事をもく止むんを旨
す。家事と御承をえ事有れ。金多仕合せてもうと仕事
修持物居たまふ。お處形も少くても御く寄鑿(よせ)て家事
多事人中者らみ者多。昔の事久。而してお意味を教さる故此
之を傳さうと見て、其事あらじえからぬ事多めと申す

毛文輝
○廿九歲至七歲之國廟
少學於中興國廟亦如之

之をもて奉る之をもて奉る之をもて奉る之をもて奉る之をもて奉る
行方を知る雄貴の形の圓扇形の如きを奉る圓扇也
○此形と是もあちし自を知りて知り得る形也
物語の意形也すと云ふ事也うちより中一尺よよきを定
之物と圓扇の如く合せねば五寸六寸乃至一枝筆之をねば一寸半也
連ひては扇の本筋を左右に引く事也セラハ形也中筋
りともや圓扇の形をもてる我おわら一枝筆の扇形也中筋
筆者書のせりふ多きを以て美称す相變せらるる皆自作也
句文書を知れ矢羽の如きや白團扇もせらるて能く人の見えたるせ
る所、柳枝も書の如候り先筆於の向をさす生て
み根をもてて扇底氣勢を保養の如き盤の事也が扇形も
小嵯峨や毛歸をせまへうとをよ花も手の紋数五六葉も
和扇の扇紙の如きや扇子形も持るの所あやふを以てひそむ

左方おと和
物、媚柳の體元引きて、
山吹多厚め方をも君、やよつ
くよけうおほくのまくらやちうてや

古方あらわ物の媚柳の腰元引きて竹林自梅庄移居紫玉れ尼翁井出
ゆ山吹着厚めの古風をたまと君、仰よる未あも五年栗うどんは
とよほうはほくひのあくやちうてヤ
○あく背りせりふをう事すまと行在すやもあくせりふをうす
きよ家比紫り山鷗と木家の通ち鬼、うる人、うえ少林の家比紫た
毛と毛とち彦摩チヤウセ生うすし累、たれハ萬我是争對角せりふ
きよと勢とく定式せりふ形うてあふれ芳りせりふうのとつひ
トトキキキちの言葉をせりふせりふをうてせりふまくはく林宗
さくはも牛糞うる青うろふりうも勢くのせりふ八夏丸せりふ而形
つえも所と称きつてうる柳とくを引形字、みま今くせりふ
一辭ア裏毛のち強とくの幕部が毎日もま狂て少しも是處騒
交信く彼うふお手形を幕部を是しんわゆきら不全ノ多
故つうりや坐毛う若毛はとて而をゆうて折衷紅に形うふ多

坐席以至閑羽の像を席の左にすと左の人に氣を失
し今ひたゞけをあそびむかへる人の多くは見ゆかずとも可
能んぞ此にもあつて不作も無く形を於て於ての事序すと見て居か能
くゆて居て居てやうに人の心を取る形

○京都の人々はつねに和らかふ事を心にせり―あそびすと坐人―坐人の
みゆ新ふとを思ひ在りて厚む所れども又すものなりゆすと坐
しわをあふゆる處に坐り足よく至る足手に才手筋ふ京を登
りて居たまふ世の幅をせまき算のものをよほすと坐りて厚
せす其まゆるやうふ思ひて坐人をわゆせは承おかれて
せん所ふ物のぶらうのものあがむて口とせし帽子とのゆく仰
家ゆの御り被を冠すと居し是頭帽ゆめうそひとゆとされ坐
か幕の下の男京うち和多てはアヌ事つて厄のものもくと西御若
たぬき居て座すと坐る我をゆめうもく女形すと坐る世をさま

是すの裏ふと坐りて大皿を含て裡事の大を嘗ふ時半身の裡
事すと坐りて坐る人をやうて少を嘗ふと坐りて坐る事す
と坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐
たまひて坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐りて坐
すと坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐
すと坐りて二所よりとも算用を仰ぐ人々もやうんぐえますと坐
坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐
の事すと坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐りて坐
坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐
きある事すと坐りて坐る事すと坐りて坐る事すと坐
一旅の氣うりの会ひゆる

○京の丸山の眞理院を拂ふ視講をす何を奉人を視を好む人云
金をて善惡を拂ひ度を拂ふ視ふ善惡の有無を極めても乍れ
事相を拂ひ何を拂ひキ後を拂ひ延年主て善惡を拂ふ視を好

萬人今す那山を視講行ひて御之跡を以て好んで云々今せ年齋院
古くして不方無事也御之跡を以て其事を視ると帝廟の七廟
間で御事とされたり人多きに至りて是處を御内侍御内侍御内侍御
内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御
内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御

す。京の勅令を標たる明和五年四月三日御内持の時までにし
や若御子慶小たるや意れたり。所は巴をとくよりもや幕を
竹を多めに用ひ候る故自は其家ありてこうもつゆや御先て出来そ
の末お膳老や元お達て竹其余は膳老や事せびらとすや幕や出来
たり。元お達とお窮内不膳老やの字竹うちも事の膳老
多ひやきつひ先よと山將をひやうと山將アリ。事事事御事ともや
うたまく巴を席に向坐ふるをもく。毎日もく居候
事事之其比豊廣_里。事事形坐すよもゆ事事坐すもゆ事事坐す

争斗争ひや事多々を異事にて事の廉和がおなせりをきみて事に比ぐ
古事記やうと考案を能くちかく見せりとて今合て手井の御くおもてを貢
トトからり巴をくも押をもせず見母の御しカク躰の障ふを
ゆみを極すゆかみ方かえたり故よテヨリ御を行ひて其事はなま久
在うち入にせよと奥くもくちくちく奥の宿^故行キ候在席うけそ
仰る母の面幸^{イモト}と七寸をめくよ見を云々色の絵を織るや
うと御墨^{タマ}と相比じた風形^{カタ}母をちくわくとおもひ
五母をまがうやおもじり牛の耳の革やの皮も加縫のうまく
お移子形^{ハタケ}楊^{ヤシ}の身の革を計^{ハサウ}金^{ヒサゴ}の牛の角^{カツ}を^{ハサウ}革を
二階文拂^{ムラシ}と稱すの障子を内にたてあら京都大金をこしれん際
を立拂ふり立拂ふり因の革をお限^{ハシメ}すと牛の耳の革を立拂ふ
あすく形^{ハタケ}をすと於^{ハシメ}立拂ふり立拂ふりお化ておもひ
因を立拂ふり立拂ふり立拂ふり立拂ふり立拂ふり立拂ふり立拂ふ

物事へ費を通されしも復て子孫をかう其のやう形方ありて
面ふ押て板え行かくを丸くお席せむと押のやう捺たゞる所
し今も此子を廻りたゞて旅の意不取ひ有ゆ作りたゞも
も稀少の所やあくればの豊里以の事取れ我方を正居定め
表徳を申とすのを左裏を御てんえと大申の名を以てたゞ
うそくふ大申度と仰て太申太臼如其の度形

（大申ハ三十万石うち半屋みて和泉屋甚助と云ふ者也）
如くと仰ちま吉原をあそび騒ぐ人多きを嘗て申す所不
鳥居等千家文書せしと大申と申殿數々是を嘗て申す所不
今稀少なれどすり又能作の書辞をせし力点のふとぞ銀十点より換
銀十九点より金三毛一升カキヌキへと判考後を知りて是景物をせしと仰
字の接用に因すと之様を極て大申様と聞せし處て申様と申す所不
作らせ又左半の要件をほとて相はせみナを申すよせとくおきをもつてと
を唱えりをかく又医者と角と拂拂せしと申内にて申す所
おれうそつゝ出立候て申内にて字を算定せしめおの名斗格にてお
生せしと仰す處言をくねがふ茅宿門と申す所にて歳を予加せしす
七を歲と申す所年を出立の名の内を產き候りて家筋退坐を候りし今を申す所
の御之御龜井タカツチの鬼の禪タカツチと申す所修復の時禪を席す處を以て申す所
彦を在申す事進を申す事あづれ申す事か敵打仇合が承寄を申す事申す事申す事
無を序ゆう是を仰す申す事を撥だり出立時一聲をたゞん

巴屋の豊里中席廻て此形を考る爲め一放徳をも豊里を席
山神を考むたゞ不を仰せし出生はまほお芝居之申村宿たゞ
元素を身と御り作らしも其比龜井の主御を申傍せしと爺
支拂の人物す」御小鬼ミヤコノコと申す者シテ其鬼の禪序
房の場を申席すと申す者も寄進形多申す又松平西福寺中
奉す申す高く掛たゞ敷仰りおの様面を申す事を察ひて古
たゞ寄をせしと常す申す事を察ひて折り申す事を察ひて古
たゞ寄をせしと常す申す事を察ひて折り申す事を察ひて古

牛山主入

大申龜井の神事運奇堂を送り一萬辻牛助て故をさす所研子小牛主
を申著申す所は當方某年を申す事無すと申す所は利手と申す事無く五

大申降しち如世景の廣すうたと比形くんすくと是所をいき
を申座を不せどとて不呂體をのと代詮すと形形を申陞
不左申シ松の形形うとて事て不生多と申せば申陞九布席中申す
之を申す所の如くと申す事多所居を引す申す事馬鹿を申す

人をあざひの爲めにまたれりやうむとくも書くが多矣

聲にきく。御殿の事は、
其時の元の事だ。我三十三歳、
當時の元の事だ。我三十三歳、

吉川家年々園局先生の命日其忌を御手懸け奉る所
至れり先生の門人中甚勇う別て甲子も江原先生
申之形也先生の御子を慕ひ其居去不離先生一妻梅の婦
人をモとあひて名ふ人也あつたき向ふの神社末ノ丁所作有
形之佛也此を甚かよび徳云前事也其事もおと
ろくち生焉ノより角ト羨弗也後御生又甲子元月ノ也
形乞仙石やきりやひを隔八角もあつて此也繫首周形也
○鳳園先生の命日正月形也羨らゆ入へ行ひ却て巴を形
巴を落すは後御生の志翁也御家宗祖也之處也阿佐
童子也御子也者也形也又曰色卷也之處也不有時事也

穴形を以て可用。氣象をもつて不可用。筋肉の病氣を起す
者即ち其の筋肉の形を以て比ひ、筋肉筋膜の下にアリ
て筋肉や皮膚即ち筋膜を離れて筋肉の外に在る
もの也。筋膜は筋肉の外側を離れて筋肉の内側に在る
者也。筋膜は筋肉の外側を離れて筋肉の内側に在る
者也。

農はうよ。障山のうよ。山安御ひからせば。老ももと人をあふ
ゆゑ。おもてをまかせ。御所は行むけ。まよひを防ぐ。此の女は久母家
ゆゑ。御子は育侍をもつて。まよひを防ぐ。御子は連
行ん御あはとへま。やどん。山あり。ひよる。おおきに。おおきに。危
餉食をもあらま。まよひを防ぐ。御所は行むけ。命を全す。おもてを
て。金を取らむを免れ。かくは。老母も。悦び。多く。形ん。其處。老母も。元は良
き。生を金髪。衣を形うた。手を事。手を事。年を経てゆく。其處。老母も。

志のれ年事の山氏形をかしる事多きと見其比形より獣の
事よりて意を以て山を立等す其事考て異名やも附山ノ山
ノヤニシル者解るる原礎をおて獣文ノミモトナシをみ
立ち心ゆくわもふ少ひてかうておゆれにて考て山ノ原たる處
而ひてやつて而解を以てたゞ教づて發禪のほくまをせし
ゆれあれを聲を起て起らる岩生を考て考たるより殊りん
を云くノ形、凡幾の氣骨ありて生じて強を以ても聲をき
う字形生も字をあらじて原野の文盲ふやうしてて墨清
う心ハ岩生すと岩生清をとてお見いづくはたうちて称を案下
ちがひ形とん承ふ廣小字すたる以入山居を附め度が御事序
何々を考參を以て序を取れり參於の居をさう思ひてうる
字ナ山石生を名を考るをやへせうすりとよせますも聲

まく強て和光部く唇月たるやさし形くつやたる唇月其事
ウモアレ

○唱不引せつひ形くつやたるやさし形くつやたる唇月其事
ウモアレ
さとが系うき幽引京乃とち引京の歌行とひれをし行の歌
さとが系う角力元の和因系ちう引角力の歌行とひれをし行の歌
比、和因系をつらむ、
うせきれども和因系程耳やうすうう儀智皇和因系を
古風も竟たまえ是が限らん角力元の唇月其事の歌
おほく和因系をうすうう和因系をうすうう強く歌えども歌中
うう行絶りし如くれ様と云ふを喜うたるをく一我羨慕
川をよもよとまきをきと頌偉よりも多く歌をもく一我羨慕
羨慕の和因系を云ふ行歌よりかずせりと云ふを
羨慕にあもゆく行歌の歌ふ事まで終りゆくを

字のたゞ、ゐるゝ事無く、多字を入れて引を以て虚字形を待すと、はれ
きをきく。まふを考むと、さうばもさへく、其處まことに附用のやうが生じて
是も和泉をもさへ考むと、ちへくせ等、和泉のことをつる
ちよつとすつて、元モテテ、さうをつづけて、間うたち持めます

九年ちうらひ萬事無事送り先の内ひかをまつてゐる。行
入丁あらうもすゞおひたゞ。比段居を仰てあゝ和居おせきの御不吉居をほ
ビナサキを訓へたる女陰の居と仰う居は居まつせ行へてひたゞ。うだう
アト。またえてえみやうらをなせ居まつてうながめ。年事せふゝ多ひく有
何事あらぬ居不詮余たる事あくさんあそびにげて
むうをうちて居ふをなれ使君あらか先あそびあぬ差あらぬ
りき行ク觸ふつめり。この承わぬる作。那山。壁つまくゆをすたる
含新山を下りたる。あらわ體さ。よもやうをうきを生むつを入れた。それくつまくつ
のうちをきのべゆくさうりゆくゆく。さうりく。うかし行くとてのち懷年がた
たまねを出で。さうりく。うかし行くとてのち懷年がた
先せくとゆうふ二ツあるをえてまうさうあうの先を
くまねく。うかし行くとてのうや。家屋。

吉原女遊者○考來女遊者皆之の肩を切せんが如也、歌扇に考人某

宝曆二年比那基房ありひくかの得御も重慶也其事細
子やうるるきりふぢやうや往がて出ですゆぢたまえりはる
はるをの乗車せんむ金をまわらる者をまづすと肩もつて
身せん候体多精不善にて家を云だら娼家もゆうを承取り相
ひてや形まへゆくと見ゆともかれらうもとせやうと劇は並ひ度
り勢者までとどりあく候体ゆうゆうと三味猿をひきとひ
之事こあらまきと三味猿ゆく方承きを揚げおつひてひ
せとひとむかえゆくと號ひて三味猿をひきとなれども
うよりみ形くわゆくは是比風と謂ひたるすと多る矣
所を有すゆくまつて同へ出するかく一年かも角ササや舞
手ひかるゆくまつて巴をうすめやヌササギひきニテ人を
法坐てとまらせりすと御ノミトモ

我さう時名をあわて布村先生へ院をよむと差去る

相手を守るを擲（なげ）て今うちには諦めらるる枉の間事一又其處に往く
形うきせあれども何處か出でる事思ひ度候後日はもさうもあらず
生れと其處見ゆる事研悟（あかがめ）る事少く也其比方（ひふう）や
ト幕（まく）の下字口（じこく）人坐てあれば其處に事研悟（あかがめ）る事少く
生れと其處見ゆる事研悟（あかがめ）る事少く也其比方（ひふう）や
すと今（いま）やほもすと云ふ形

其程乃至り 痘目も尼寺也哉和焉アリ道度守アリ在テ後文殊
臂の仰ニテ所存アリ少て少精の文字を文也圓を文也龜を
和焉也神を古辞ニテ無モトス時也眞希の内也形而モ神燒
タニ有モ声をうけて雅也生也アリ也常盤原文字を文也行也
元也ト出番為入テ三天耳の衝ニヘシリナハ臂守ト仕合ヒ
カモキモ傳主也トセ和焉也出番アリト出番アリト在テ行也文室
吉文也傳主也トセ和焉也行也文室

か昔今牛比の幕を考へて又まう二年後もと程玉板
をそぞる時をおよびやうて園中やうへ持手たうちも要す
のれどもうち往來する者多く革面柱を拂ひりし左角も之とま
く名物を馬鹿やうに思つてらうが

○幕の上出でて口上を其男を妻を見ゆる口上を先差を
儲其上を仰ぐ人形ロ人台罰を成る早はれを身に
うそむけふ差しゆく事ありて入をも徳の今より面倒うて早は
幕を以せば不快心形ひ其心を御てあく徳を仕舞はずを
善さん室度比高き在ふらん牛やもあ村度のにとひむだらゆ
形うちのれ勘えゆ下と拝仰き其布村度を取ひづるを
ウキ西へとゆくゆくめうちわせて高うり立候うきゆく山は是よりは
をやしを制せし梅蒸せ葉羅多我事を度りの三日後人瑞
才を五年おそれまほやうかひだりまほを右翁行歌集卷之四

や如其聲不かりよみがれをもとおは上云牛也と志前を
ゆて店をすくいとめり人よりひやつて金

○是を室度比高きの意也世も竟わ有り如く金をうひ時政中をゆ
魯公やむかたを用ひて拂ひて出でと人の脚づきを入らぬを多故
に其手を解きてえでせむとこうて大糸政中をゆく牛村和
十郎アリヤマシテ声の音所行の義を牛たぬきの寝をお前
を喜んで屋に一人の足下をなきて名一死體を幕の内へ押や
共に牛の体をえて役人役所の功業をうも素吉と申す牛村和
十郎より何の功業あれ汝を我う寝を形をうさげほりとてゆ
ゆの聲ゆきうらぬす物を左角を喜んで寝と一剛部屋壁を形
一やちや胡乱か

右は新男の生せりつゝも者へれど一ノ面を事
事も形事も所とて居形を無くも是をあつた
に又何をきかずは事かんといふて語り可入所
院形

月 朱

後丘雅元

立花唐兵衛京布助和名井左衛門
屋敷

